Ondt から and へ

——「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」における二枚目の鏡——

金　井　嘉　彦

ジェイムズ・ジョイス（James Joyce）は，『ユリシーズ』（*Ulysses*）で用いた，一方が問い一方が答える対話形式，あるいは設問形式を，『フィネガンズ・ウェイク』（*Finnegans Wake*, 以下においては『フィネガン』と略記）においても大々的に展開していく。第3巻第1章もまたそのような章である。この章は14の質問とそれに対する答えから構成される。その8番目の質問に対する答えの中には，寓話「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」（"the Ondt and the Gracehoper"）が挿入されている。本論では，同様に12の問いと答えからなる第1巻第6章中の寓話「ムークスとグライプス」（"The Mookse and The Gripes"）と比較しつつ，この寓話の意味を明らかにしたい。

I

「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」（"the Ondt and the Gracehoper"）の寓話は，その綴りからも容易に想像できるように，「アリとキリギリス」（"The Ant and the Grasshopper"）の話を下敷きにしている。アリが一生懸命働く姿を後目に夏に遊んでばかりいたキリギリスが，冬になって食べ物がなくなって困り，あらかじめ必要に備えることの重要性を知るという馴染み深いイソップの寓話をも踏まえつつ，夏の間ずっと歌を歌っていたセミが北風が吹く季節を迎えて食べ物に困り，アリのところに春になるまで食いつなぐための穀物を貸してくれるよう頼みにいったところ，理由を聞かれ，夏の間歌を歌っていたと答えたら，それでは今度は踊りなさいと言われる，ラ・フォンテーヌの「セミとアリ」の寓話をジョイスは下敷きにしたと言われている[1]。ちなみにここで「アリとキリギリス」と「セミとアリ」という異なった題名の寓話が二つ出てきたが，セミのいない文化圏でセミの代わりにキリギリスが用いられただけで，同じ話であると言ってよい[2]。その大枠は本寓話においても保たれている。寓話「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」(414.22-419.08) の内容は，およそ以下のように要約できる[3]。

慈悲希望スは，ヴァイオリンの弓のような足で体を支えながら，彼の楽しむ性格ゆえに，あるいは，楽しい街に住んでいるためにいつも幸せな気分で踊りながら街の中を闊歩していた。そうでなければ，メスの虫たちに優美とは言えない誘いをかけては，常緑樹の陰で遊んだり，虫同士の近親相姦を楽しんでいた。メスたちが恥ずかしさの余り顔を暗褐色にするまでいたずらを続け，「何ものにも似ず」と呼ばれる彼の小屋と同じくらい夏らしい時間に，地上で一番のショッピングセンターで買った絹のストッキングを穿かせたりしていた(4)。そうでなければ，年老いた彼のおじいさんのゼウス／時と一緒に，おかしな葬式の音楽（“funny funereels” [414.35]）をかき鳴らしていた。これを見ていた怒蟻（イカアリ）は，「なんてことだ！とんでもない！狂気の沙汰だ」と叫んで，彼の「駄目駄目駄目」と呼ばれる冷たい非熱帯的な家の鏡の前で冷たいしかめっ面をする。そしてどうすれば怠け者に対する軽蔑の念を表すことができるかを考える。

馬鹿な慈悲希望スは，まるで夏がいつまでも続くかのように，同じ調子で暮らしていく。競馬，酒，女遊びの限りを尽くし，気がついてみれば教会のネズミと同じくらい貧乏になり，パン一つも買えず，「心の底から腹が減った」と嘆く。家具，壁紙，階段などある物すべてを食べ尽くし，クリスマスがやって来て，木々の枝に雪しかなくなったとき，慈悲希望スは外に出て食べ物を探す。歩いて，歩いて，歩き回って，ついには彼の頭もおかしくなる。これでもう駄目だと観念する。

その間「真実のそして完璧な主人」怒蟻（イカアリ）の方はといえば，縮むことのないパジャマを着て，大きな特製のハバナ産の葉巻をくゆらせながら，広い玉座の上で体を伸ばしている。彼のまわりには4匹のメスの昆虫たちが取り巻いている。慈悲希望スは怒蟻（イカアリ）を見て，身を震わせながら「こんちくしょう」と叫び，羨望の余り呆然とし，途方に暮れる。怒蟻（イカアリ）はこれほどの物はない冗談に気をよくする。怒蟻（イカアリ）があまりに騒々しい笑い方をするので，彼の顎が外れるのではないかと慈悲希望スは心配になる。慈悲希望スは，「俺はお前を許す。メス達によくしてやってくれ。いい思いをしたのだから，俺は今その報いを受けなくてはならない」という。

II

この寓話の特徴は，なによりも虫の言語で書かれている点にある。虫の言語というのは，虫が使う言語のことではもちろんなくて，種々の言語から取ってきた様々な昆虫を意味する言葉や，昆虫に関連する様々な言葉を普通の文章の中に，時にはあから

さまに分かる形で，時には見えないようにして，はめ込んでいることを指して虫の言語といっている。例えば，この寓話は次のような書き出しで始まる。

> The Gracehoper was always *jigging* ajog, hoppy on akkant of his joyicity, (he had a partner pair of findlestilts to supplant him), or, if not, he was always making ungraceful overtures to *Floh* and *Luse* and *Bienie* and *Vespatilla* to play pupa-pupa and *pulicy-pulicy* and *langtennas* and *pushpygyddyum* and to commence *insects* with him, there mouthparts to his orefice and his gambills to there airy processes, even if only in chaste, ameng the everlistings, behold a *waspering* pot. (414. 22-29)（斜字体は筆者による）

慈悲希望スが，ヴァイオリンの弓のような足で体を支えながら，彼の享楽的性格ゆえに，あるいは，楽しい街に住んでいるためにいつも幸せな気分で踊りながら街の中を闊歩したり，優美とは言えない誘いをノミ子やシラミ子やハチ子やスズメバチ子にかけては，性的な遊戯にふけっていたことが書かれた部分であるが，斜字体で表した語には虫に関係した言葉がなんらかの形で含まれている。ジョイス自身が注釈を施しているように[5]，“Floh” はドイツ語の「蚤」，“Luse” は，デンマーク語で「シラミ」を意味する言葉，“Bienie” はドイツ語で「蜂」，“Vespatilla” はラテン語で ‘little wasp’ を意味する語，“pulicy-pulicy” には「蚤の」を意味する ‘pulicine’ が含まれている。ジョイス自身が説明をしている語以外にも，‘jigger’（「ツツガ虫」）を含んだ “jigging”，‘antenna’（「触角」）を含んだ “langtennas”，‘pygidium’（「尾節」）を含んだ “pushpygyddyum”，‘wasp’（「スズメバチ」）を含んだ “waspering” が見られる。“insects” が ‘incest’ に加え ‘insect’ を意味している語であるのは言うまでもない[6]。ちなみにこの寓話の表題に現れる “Ondt” が，‘ant’（アリ）を意識した語であることは言うまでもないが，この語はデンマーク語で ‘evil’ を意味する語である。ジョイス自身はノルウェー語で ‘angry’ の意味であると説明している[7]。それとともに，‘don't’ の綴りを並べ替えて作った語，アナグラムであり，否定する者であることを示す。それは彼の家が否定の語を 3 つ連ねた “Nixnixundnix” (415.29) と呼ばれていることからもうかがえる[8]。このようにアリはもちろんのこととして，悪，怒り，否定という意味を持つ “Ondt” の意味合いを可能な限り表すことができるように，本論では怒蟻（イカアリ）と表記する。

こうしてこの虫を扱った寓話は，全体に様々な虫に関係した言葉がちりばめられ，全体が虫に関係した言葉でできあがることとなり，文字通り虫に関する寓話となる。何が起こっているかその意味を取る表面的なレベルで虫の姿を見ることは少なくとも，

副次的なレベルでは様々な虫が蠢く世界が立ち現れる。この手法自体は，ジョイスを知る者であれば取り立てて目新しく感じることはない。小規模ながらも『ユリシーズ』においてすでに使われていた技法が，『フィネガン』の中で敷衍されて，この章よりも前の，例えばALPを扱った第1巻第8章でも，世界中の河の名前が同じようにして文中に練りこまれていたのを思い出すことができるからである。

第二の特徴は，道徳性を前面に押し出す寓話という形式にふさわしく，慈悲希望スと怒蟻(イカアリ)とが対照的に描かれている点にある。前者が快楽を追求するのに対し，後者は苦虫をつぶしている。前者には "so summery" (414.33) と夏が割り当てられるのに対し，「夏に浮かれる馬鹿者ではなく」("not being a sommerfool" [415.27]，ちなみに，デンマーク語で *'sommerfugl'* は 'butterfly')，「冷たい空間を作る」("making chilly spaces" [415.28]) 後者は，冬の属性を持つ。それゆえに，姿見は "icinglass" (415.28) となる。この夏と冬の対比は，南あるいは熱帯と北あるいは寒帯の対比に容易に転化される。怒蟻(イカアリ)の家が「駄目駄目駄目と呼ばれていた」と説明する部分は "was cold antitopically Nixnixundnix" (415.29) と表現され，熱帯とは対極にある冷たい場所であることが分かる。「ムークスとグライプス」の話と同じように，時間と空間の対比も見られる。この寓話では，慈悲希望スに時間が割り当てられ，怒蟻(イカアリ)には空間が割り当てられている。慈悲希望スと時間との関係は，慈悲希望スが音楽を奏でることからまず示唆される。音楽は時間の経過を伴わない限り成立しない芸術形式である[9]。そのことからすれば彼が「盲目」(417.03) であると聞かされてもさほど驚く必要はない。聴覚が時間的なのに対し，視覚は空間的であると言えるからである。彼のおじいさんは "Zeuts" (414.36) である。この言葉は，'Zeus' とドイツ語の時を意味する *'Zeit'* との合成語である[10]。また，このようにして過ごすのは時間をつぶすためである ("zeemliangly to kick time [seemingly to kill time]" [415.24])。

一方の怒蟻(イカアリ)には，空間という言葉がついてまわる。鏡の前でしかめっ面をする際も，"making chilly [silly/chilly] spaces [space/faces] at hisphex [himself] affront [in front] of the icinglass [looking glass]" (415.28) と表現され，体のつくりががっしりしていることを説明する場合にも，ドイツ語で空間を意味する *'Raum'* を含む "raumybult" (416.03) という言葉が使われる。彼が玉座にふんぞり返っている様を表現するときにも，ロシア語で空間を意味する語，*'prostranstvo'* を含む "prostrandvorous" (417.11) という言葉が使われる。彼の吸う葉巻もまた "spatial brunt" (417.12) と表現され，特別なものであると同時に空間的なものであることが分かる。しかし二匹の虫のこのような対照性は，のちに見るように内部から脱構築されていく。

III

「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」は，第1巻第6章で語られる，同じようによく知られた寓話を下敷きにした寓話「ムークスとグライプス」と対になっていると言われる。テクスト上でもこの二つの挿話はしばしば結びつけられる。例えば，

> "aandt out of her grosskropper and leading the mokes home by their gribes" (331.15-17)
> *"he was pallups barn in the minkst of the Krumlin befodt he was popsoused into the monkst of the vatercan, makes the holypolygon of the emt on the greaseshaper"* (339.33-36)
> "for the meekest and the graced" (365.14-15)
> "the muckstails turtles like an acoustic pottish and the griesouper bullyum" (393.11-12)

といった具合に，それぞれの挿話とは関係のないところで双方の登場人物が結びつけられるのを確認することができる。また，*"you quit your mocks for my gropes"* (418.32) とあるように，「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」の中でもムークスとグライプスに対する言及が見られる[11]。

テキスト上で関連づけられることの背後には，外見は大きく異なるものの，両者が共通する点を多く含むパラレルな物語であることがある。すでに述べたように，両挿話ともが質問とそれに対する答えで構成される章の中で語られていて，両者ともがその質問に対する答えの一部として提示されている。テーマの点でも共通点がいくつか見受けられる。

ここでもう一度「ムークスとグライプス」の挿話がどのような話であったかを見ておこう。この挿話は，通常イソップの寓話を下敷きにした宗教論争と考えられているが，その深層にはもう一つ別の物語が隠されている。それはつまり，空間しか存在のしない太古の（とはいっても正確にはまだ時間の始まっていない）楽園とおぼしき空間に「生きる」（と同時に空間しかなく時間を与えられていないがゆえに，人間的な意味においてはまだ「生きて」いなかった）者が，時の果実を手に入れることにより，人間的な意味において「生きる」ようになった，と同時に死すべき運命をも得る，楽園喪失の物語であった。そこに内在する根元的逆説は，水に映る自らの姿と話す頭のおかしな人物の姿に転写されていた。鏡のイメージは意味と論理を反転させ，向かい

合わせた鏡に映る世界にも似た，逆転した奇妙な世界を現出させ，その中で失墜の物語は，神の失敗の物語となると同時に自ら望んで失墜する者の物語となっていた[12]。

確かに「ムークスとグライプス」の挿話と同じ行動様式が「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」の寓話にも見られる。「文句を言う」という意味を表す 'gripe' をその名前の中に含み，酸っぱいブドウのように苦い思いをさせる人物グライプスにムークスが出会うように，慈悲希望スは彼のことをいまいましく思い，しかめ面をした怒蟻(イカアリ)に出会う。"that true and perfect host" (417.24) と形容される怒れるアリ，怒蟻(イカアリ)は，旧約聖書に登場する怒れる神を確かに連想させる。そしてその出会いが行われるのは，どちらの場合もユートピア的な空間である。ムークスの場合にはエレフォン的な一人しかいない始原の空間においてであったが，慈悲希望スの場合は楽園を思わせる "joyicity" (414.23) においてである。"joyicity" が単に慈悲希望スの享楽的な性質を表すのではなく，彼がいる場所自体が楽しい街であることを示す語であることは，草稿においては "A gracehoper was *always* jigging around in his joyicity" と，"joyicity" という言葉が場所を示す前置詞 'in' の後に置かれていることからも分かる[13]。この街の楽園的性質は，彼の住む家が "Tingsomingenting" (414.34) と呼ばれることでさらに強く示唆される。これはデンマーク語で 'a thing like no thing' を意味する *'en ting som ingen ting'* を踏まえたもので，比較すべき対象を持たない場所，あるいは「ないものと同じようなもの」の意となり，もともとどこにもない場所という意味のユートピアと同義であると考えることができるからである。その空間で慈悲希望スは怒蟻(イカアリ)の逆鱗に触れ，食料のしまってある倉庫の鍵を閉められる。その結果腹をすかせ，食料のない冬を迎えるその過程は，楽園からの追放と受け止めることができる。失墜はこのほかにも様々な言葉で示唆されている。慈悲希望スがメスたちが困るまでいろいろ悪ふざけをするのは，"of curse" (414.29) とされる。これはもちろん，'of course' を意味するところに 'curse' を含めた地口である。これによりそのような行いをするのは，「呪いによる」ことになる。彼が踊りを踊るとき軸にするのは，"around his eggshill" (415.09-10) とされる。ここには『フィネガン』においては失楽と同じ意味を持つ 'exile' が見て取れる。"love and debts" (416.09) の生活を送る慈悲希望スは，"fell joust as sieck as a sexton" (416.12-13) と「シデムシのように／非常に気持ちが悪くなった」と同時に「サタンのように失墜し」ている[14]。

「ムークスとグライプス」が時の果実を求めることにより人間的な意味で生きるとともに死すべき運命をも手に入れることを希求する者の話であるならば，「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」は，その時を得てしまった者の話である。そのことは「ムークスとグライ

プス」においてと同様「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」において最も重要なテーマの一つである時と空間が，その関係を逆転させた形で表されていることに見て取れる。二つの寓話では，時と空間が逆のタイプのキャラクターに割り当てられているからである。その行動様式からムークスに相当するのは慈悲希望スであり，グライプスに相当するのは怒蟻(イカアリ)であると言える(15)。「ムークスとグライプス」においては空間を割り当てられていたのはムークスであったが，「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」においては，彼に対応する登場人物である慈悲希望スには時が割り当てられている。それに伴いグライプスに相当する怒蟻(イカアリ)には，時間ではなく空間が割り当てられているのである。時間と空間とが，それぞれ逆のタイプの人物に割り当てられることの意味は，「ムークスとグライプス」の話と「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」の話との間で，決定的な出来事，つまりは時の獲得＝失墜が起こっていたことをなによりも物語っている。

慈悲希望スが時の経過がなければ成り立たない芸術形式である音楽を楽しんでいるのは，彼がすでに時を手に入れたことによる。慈悲希望スという名前も示唆に富む。ここでは「アリとキリギリス」という寓話の題名に近づけるために，敢えて彼の名前をキリギリスに近い慈悲希望スとしたが，彼の名前 “Gracehoper” はもちろん恩寵を望む者という意味である。そのことはつまり，彼が ‘grace’，すなわち恩寵を失っていること，それがないことが重大な結果を生み出すがゆえにそれを望まざるを得ないことを示している。その名前を付けられたときからすでに，彼は失楽後の世界に住むことを定められていると言ってもよい。そういう定めを背負っている者ならば，メスの虫達への彼の誘いが，“ungraceful” と表現されても仕方がない。そして彼は色事に溺れている。性行為は『フィネガン』においては，食物同様禁断の木の実を食べることと同義であった。今彼が性に溺れているのは，人間が死の運命を得ることと引き換えに得た知識を実践していることを単に示しているにすぎない。彼が「死の舞踏」(“dance McCaper [danse macabre]” [415.10]) を踊っているとされるのも，「時間を蹴っつぶしている」(“kick time” [415.24]) とされるのもなんら不思議はない。そこで歌われる歌も失墜を示唆している。*“Hombly, Dombly Sod We Awhile”* と *“Ho, Time Timeagen, Wake!”* (415.14-15) に，“Humpty Dumpty sat on a Wall” と “Tim Finnegan’s Wake” が認められるならば，どちらも ‘fall’ についての歌であることに気がつく。そしてまた，慈悲希望スの生きるこの世界には重力が生じている (“chorous of gravitates” [force of gravity] [417.36-418.01])。重力は，『フィネガン』においては，失墜がすでに起ったことの指標である。

すでに述べたように，この寓話の中には哲学者の名前がいくつか登場する。そもそ

もこの寓話は，“I would rather spinooze you one from the grimm gests of Jacko and Esaup, fable one, feeble too.” (414.16-18) と「ヤッコとエサウプのいかめしい冗談／グリムの物語から一つを，寓話その一その二とスピノザ風に／紡いで話したい」というショーン (Shaun) の台詞から始まっていて，哲学者の名前が登場することを最初から予兆している。なるほどその予兆通り慈悲希望スは，“hoppy on akkant” (414.22) と「カントのことを考えて幸せな気持ちになり／跳び回り」，“at the earths-best shoppinghour” (414.33) とあるように，ショウペンハウアーをもじったショッピングセンターでストッキングを買い，“leivnits in his hair” (416.29) と「髪の毛にはライプニッツがついている」。また，“The June snows was flocking in thuckflues on the hegelstomes” (416.32-33) と「6月の雪は厚く，雹／ヘーゲルの石／嵐となって降り注ぐ」。怒蟻(イカアリ)にしても “a schelling in kopfers [<G. *Kopf* : head]” (416.04) と頭にはシェリングが入っている。また彼は “sated before his comfortumble phullupsuppy of a plate o'monkynous and a confucion of minthe (for he was a conformed aceticist and aristotaller)” (417.14-16) と描かれる。“comfortumble” は ‘comfortable’ と ‘tumble’ の合成語，“phullupsuppy” は ‘philosophy’ と ‘full up’ の合成語であり，“o'monkynous” には ‘monkeynuts’ と ‘Mencius’ が透けて見える。“confucion” には ‘confusion’, ‘confection’, ‘confession’ と ‘Confucius’, “aristotaller” には ‘artist’, ‘teller’, ‘teetotaller’ のほかに ‘Aristotle’ が含まれている。孔子やアリストテレスが出てくるのであれば，“plate” は単なる皿というよりは，‘Plato’（プラトン）であろう。そうするとここには「一皿の落花生とミントのお菓子からなる心地よい，お腹いっぱいになるような夕飯を前に座っていた（というのも彼は断固とした禁欲主義者であり禁酒主義者／芸術的語り部であったから）」という表面的な意味のほかに，「安らぎとつまずきをもたらすプラトンと孟子の哲学と孔子の精神／心情告白を前に座っていた（というのも彼は断固とした禁欲主義者でありアリストテレス派であったからである）」といった意味が隠されていることになる[16]。

哲学者の名前が登場することも，失楽が起こってしまっていることと関係がある。哲学とは，善悪の判断を可能にする禁断の実を食べることによって得られた知恵にほかならないからである[17]。“For if sciencium (what's what) can mute uns nought, 'a thought, abought the Great Sommboddy within the Omniboss, perhops an artsaccord (hoot's hoot) might sing ums tumtim abutt the Little Newbuddies that ring his panch.” (415.15-19) というときの “sciencium” はラテン語の ‘silentium’, つまりは ‘silence’, “uns” はドイツ語の ‘us’, “artsaccord” は ‘harpsicord’, “hoot's

hoot" は "what's　what" に対し 'who's　who', "ums" は "uns" の変形で 'us', "tumtim" は 'something' であるとともに擬音語, "Newbuddies" は 'nobody' であろうから, 全体としては「というのももし黙っていろと言われたからといって（何が何であるか）我々を黙らせることができないなら, 乗合馬車の中の／全能なる主である偉大なる誰かについて少し考えてみれば, あるいは多分に／願ってはハープシコード（誰が誰たるか）が, 彼の腹を鳴らす小さき名もなき者たちについて何かをチリンチリンと歌って我々に教えてくれるであろうからである」といった意味になる。ここでいう「偉大なる誰か」についての思考こそ哲学にほかならない。楽園に住む者には哲学は必要ない。そこから追い出されて, "life in doubts" (416.10), つまりは, 文字通りに解釈するならば「疑念の中で送られる生」, あるいは, 'life in death'（「死の中にある生」）が始まったときに, 哲学が生まれたのである。

Ⅳ

「ムークスとグライプス」においては, 神と子の間の似姿としての関係によって作られる鏡のイメージにより, 向かい合わせた鏡に映る世界にも似た, 奇妙な逆転した世界が現出し, その中で失墜の物語は, 頭が正常とは思われない神の失敗の物語となると同時に, 自ら望んで失墜する頭のおかしな者の物語となっていた。「怒蟻（イカアリ）と慈悲希望ス」においては, そのような逆転と狂気とはさらに増幅されているように見える。

「怒蟻（イカアリ）と慈悲希望ス」においても「ムークスとグライプス」と同様頭のおかしいキャラクターが登場する。「ムークスとグライプス」においては, ムークスが散歩に出かけるのは精神病院 ("azylium" [152.36]) からであったし, 彼が出会うムークスも「頭に酒がまわって」("his whine [wine] having gone to his palpruy head" [154.14-15]) と表記され, 両者ともが普通の状態ではないことが示唆されていた。「怒蟻（イカアリ）と慈悲希望ス」においても, 慈悲希望スは "the grillies in his head and the leivnits in his hair made him thought he had the Tossmania" (416.28-30) と描かれる。一番最初に用いられているのはイタリア語の *'aver grilli in capo'*, つまりは英語でいう 'to have a bee in ones bonnet'（頭がおかしいの意）に相当する表現を, 一部をイタリア語のまま用いたものである。"leivnits" には 'Leibnitz'（哲学者ライプニッツ）と 'live nits'（シラミなどの幼虫）が読みとれる。ライプニッツは, すでに見たように, この世界に哲学すなわち禁断の木の実を食べることによって得られる知恵が広まっていることを示す指標である。"Tossmania" については, "he stands on his head to be really

'antipodal'" とジョイス自身が註をつけていることからも分かるように[18]，ちょうど『不思議の国のアリス』の中でアリスが想像した地球の反対側にいる人間のように，頭と足を逆さにして頭を地につけて立っている状態を指す。したがって全体としては「頭の中では蜂がぶんぶん，髪の毛についたライプニッツとシラミで頭がおかしくなった／頭を地につけて立っている／自分がタスマニアにいると思った」という意味になる。興味深いことに，もう一方の怒蟻(イカアリ)の方も，"with...Bieni bussing him under his bonnet" (417.17-19) と描かれ，形こそ異なっているが，実質的には同じ表現で頭がおかしいことが示されている。"Bieni" は，すでに触れたように，ドイツ語の「蜂」で，またしても「帽子の中に蜂がいる＝頭がおかしい」のである。

ムークスとグライプスの場合には，オランダ語の *'mukke'* が英語の 'gripe' (「文句を言う」) に相当する語であることから，二人の同一性が指摘されていた[19]。「ムークスとグライプス」の挿話においては，二人は水面という鏡を挟んで存在する同一人物の異なった姿にすぎなかった。その同一化には，神と人類の始祖アダムとの間のイメージ（似姿）としての関係が重ね合わされ，大きな役割を果たしていた。この一方が他方の似姿である関係も「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」に継承されている。慈悲希望スは "wheer would his aluck alight or boss of both appease" (417.07) と考える。これは実は，『フィネガン』第1巻第1章でプランクイーン (prankquean) が出したなぞなぞ，"why do I am alook alike a poss of porterpease?" (21.18-19) の変異形で，つまりはどうして自分の容貌が一対の豆のようにもう一方の虫と似ているかをいぶかしく思っているのである。この二匹の虫はまた，"these mouschical umsummables" (417.09) と表現される。ここには，'music hall', 'musical', 'ensemble', アキナスの *Summa Theologica* (『神学大全』) を思い起こさせる *'summa'* が読み取れるであろう。したがってここにはミュージックホールに一緒に出演している歌手あるいは演奏家という仲間であることを示す語を読み取ることができるのと同時に，音楽的調和と調和できないものという相反する意味を同時に意味する言葉を見て取れる。二匹はまた *"These twain are the twins that tick* Homo Vulgaris" (418.25) とも言われる。*"tick"* はダニであるとともに，「時を刻む」を意味する語であるが，ここでは「時を始めた」，つまり，すでに見た失楽による人類の時の開始をもたらした，という意味に解釈することができる。"Homo Vulgaris" はラテン語で 'ordinary man' の意。したがって「この二人が普通の人間に時を与えた双子である」といった意味になる。

この二者の同一性は語り口によっても補強されている。確かに道徳性を前面に押し出す寓話という形式にふさわしく，慈悲希望スと怒蟻(イカアリ)は対照的に描かれるのであるが，

その一方でその対照性は内部から脱構築されていく。先ずは慈悲希望スを描き，その後で怒蟻(イカアリ)がそれに相対する存在として提示された段階で，二者の対照性は最高潮に達するが，その後は，あたかも二者の内在的な同一性を語り手が意識してしまったかのように，語り口がはっきりしなくなっていく。つまり，どちらのことを描いているのかが，分からなくなるのである。例を挙げるならば，怒蟻(イカアリ)が導入されてまもなく，"We shall not come to party at that lopp's, he decided possibly, for he is not on our social list" (415.30-31) という文章が現れるが，ここで使われる代名詞がどちらの虫を示すかはそれほどはっきりしない。『フィネガン』の先駆的研究書 *A Reader's Guide to* Finnegans Wake の著者ウィリアム・ヨーク・ティンドール (William York Tindall) のように，怒蟻(イカアリ)が慈悲希望スのところで開かれるパーティーに行かないと言っているようにも読めるし[20]，あるいは逆に，『フィネガン』全体の中に聖書，とりわけ失楽の物語を読もうとする *Narrative Design of* Finnegans Wake の著者ハリー・バレル (Harry Burrell) のように[21]，慈悲希望スが怒蟻(イカアリ)に寄りつかないでいようと言っている，とも読める。専門家の間でも意見が分かれるほど，どちらのことを説明しているのか分からない箇所が後半には見られる。とりわけこの寓話の最後につけられた斜字体で書かれた「賛歌」とおぼしき部分は，二匹の虫の描写から始まるものの，次第に一般的な事柄へと変化していき，二匹の虫の姿は見えなくなっていく。

同一の虫であるならば，慈悲希望スの行うことを非難していたはずの怒蟻(イカアリ)が，慈悲希望スがしていたことと全く同じことをしてしまうのも納得がいく。冒頭部では慈悲希望スが "Floh and Luse and Bienie and Vespatilla" にちょっかいを出していたことが語られているが，後半では，"with Floh biting his leg thigh and Luse lugging his luff leg and Bieni bussing him under his bonnet and Vespatilla blowing cosy fond tutties up the allabroad length of the large of his smalls" (417.17-20) と，今度は怒蟻(イカアリ)が彼女たちをはべらせている。また，"chasing Floh out of charity and tickling Luse, I hope too, and tackling Bienie, faith, as well, and jucking Vespatilla jukely by the chimiche." (417.29-31) とあるように，ちょうど書き出しの部分で慈悲希望スがしていたように，怒蟻(イカアリ)はメスの虫たちを追いかけ回している。また，慈悲希望スの家 "Tingsomingenting" (414.34) が "thingsumanything" (417.26) と怒蟻(イカアリ)の側に転化され，怒蟻(イカアリ)の家の名前とされた "Nixnixundnix" (415.29) が，"Nichtsnichtsundnichts" (416.17) と慈悲希望スの絶望の声へと転化されても，二匹が同一であるならば不思議ではない[22]。

この二匹の虫の同一性は虫の言語によって巧妙に示されている。慈悲希望スには怒(イカ

蟻(アリ)が最初から書き込まれているのである。慈悲希望スが女性に絹のストッキングをはかせたというところには，“fourmish” (414.32) という言葉が使われ，一義的には ‘furnish’ を意味するが，ここにはフランス語の *‘fourmi’*，すなわちアリが内部に含まれている。同様に彼の小屋がどのように呼ばれていたかを説明する部分でも，“fourmillierly” (414.34) とフランス語でアリ塚を意味する *‘fourmilier’* を含む言葉が使われている。彼が行う行為にも，彼が住む場所にもアリが刻印されているのである。一群の歌い手に伴われて歌を歌っていることを示す部分では，アリの一種 ‘Myrmica’ を含む “myrmidins” (415.13) という言葉が見られる。困り果てて頭を地につけた慈悲希望スは”his odderkop in the myre” (417.33) と描かれるが，*‘mire’* はデンマーク語でアリを意味する言葉である。怒蟻(イカアリ)に意地悪をされてこれほど困ったことはないと言うところでは，*“I could not feel moregruggy”* (418.19) と表現される。ここではもちろん ‘more groggy’ が表面上の意味であるが，ここにはウェールズ語でアリを意味する *‘morgrugyn’* が隠されている。

このようにして確認される対照的なはずの慈悲希望スと怒蟻(イカアリ)の同一性は，鏡を間に置くことによって形成されている。繰り返しになるが，その鏡を生み出す原理とは，神と神の似姿としての人間という関係である。鏡はその外と中に，空間が異なっているがゆえに，あるいは逆転を伴うがゆえに異なってはいるが，元が一つであるがゆえに同じ二匹の虫を生み出す。しかしこの寓話においては，この鏡にもう一枚の鏡が付け加えられている。その鏡は失墜によって用意される。二枚目の鏡も一枚目の鏡同様ものの有り様を逆転させるとともに，同じものを二つの異なる空間に形を変えて生み出す。

この鏡は，「ムークスとグライプス」と「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」との時間と空間との関係を逆転させ，時を始める。この鏡は慈悲希望スを楽園から追放し，額に汗をしなければ食物が手に入らないようにする。彼が食料がなくなって困る冬とは，まさに逆転された楽園なのである。それゆえに慈悲希望スは突然「トスマニア」となり，不思議の国に向かうアリスが想像した対蹠地人のように頭を地につけて立つ者となる。怒蟻(イカアリ)は，“The veripatetic imago of the impossible Gracehoper on his odderkop in the myre” (417.32-33) と表現される慈悲希望スの姿を見て喜ぶ。“veripatetic” には ‘peripatetic’ (「歩き回る」) とともに ‘very pathetic’ (「とても悲哀を感じさせる」) および ‘veritable’ (「全くの」) の意が含まれている。“imago” はそのままの形で「成虫」の意を表すとともに，ラテン語の *‘imago’* (「似姿」) を意味する。“odderkop” はジョイスが註をつけているように ‘other head’，“myre” はすでに触れたようにアリであ

るとともに，‘mire’「泥地，苦境」であるから，全体としては「どうしようもない慈悲希望スが頭を泥の中に埋もれさせて／苦境の中で歩き回る／とてもかわいそうな／まさにその姿」といった意味になる。歩き回る姿は額に汗を流さなければ食料を手に入れることのできなくなった失楽後の人間を思い起こさせる。事実，慈悲希望スはお腹をすかせている。‘hungry’なのは，‘angry’の地口として機能し，怒れる怒蟻（イカアリ）を失楽という鏡に映した姿である。

こうして失楽の物語は二枚の鏡によってその悲劇性を奪われる。死すべき運命と引き換えに時の果実を自ら手に入れた頭のおかしな人物（人間）の話となると同時に，自らの似姿を楽園から追放し，額に汗をしなければ食物が手に入らないようにし，時が来れば塵へと帰る運命を背負わせた頭のおかしい人物（神）のしかけた冗談へと変えられてしまう。“He was sair sair sullemn and chairmanlooking when he was not making spaces in his psyche, but, laus ! when he wore making spaces on his ikey, he ware mouche mothst secred and muravyingly wisechairmanlooking.”（416.04-08）と言われるのはそのためである。必要な部分だけ説明を加えると，最初の“sair”はドイツ語で‘very’を意味する‘*sehr*’，二つ目の“sair”は‘sour’，“chairmanlooking”は‘Germanlooking’，“ikey”はギリシア語で‘image’を意味する‘*eikon*’である。ここで重要と思われるのは，“making spaces”がドイツ語の‘*Spaß machen*’，すなわち‘make joke’をも意味することである。つまりここで言っているのは，「彼は冗談を言っていないときにはとてもふさぎ込んで議長面／ドイツ人顔をしているが，誉め讃えよ，彼が似姿に関し冗談を言っているときには，彼はこの上なく神聖でアリがたくも賢い議長面／ドイツ人顔をしているのである」といった内容になる。これは，「ムークスとグライプス」においても頻繁に見られたウィンダム・ルイスへの揶揄であると言われている[23]。この「似姿に関する冗談」こそ，「ムークスとグライプス」および「怒蟻（イカアリ）と慈悲希望ス」で語られている失楽の物語にほかならない。もう一点興味深いのは，この文章中の“laus”の持つ意味の可能性であろう。表面上は‘alas’を意味しつつも，ドイツ語で‘lause’を意味する‘*Laus*’を虫の言語として浮かび上がらせるこの言葉は，ラテン語では‘praise’の意味になる。その一方で冗談を言っているときのことを言っているのであるから，‘laugh’をも呼び起こす。そのことは，彼の「冗談」――つまりは慈悲希望スがしていた不埒な行いは，実は怒蟻（イカアリ）もしていたことであったのに，そのことを理由に慈悲希望スに制裁を加え，首尾よく困らすことができたこと，および快適な空間を独り占めすることができるようになったこと――のあとで捧げられる「賛歌」とおぼしき歌の中で，彼が顎が外れそうになるくらい笑うことを

見れば分かる。失楽が冗談となるのと同じくして，神を讃えることと笑うことは等価になる。こうしてこの世は "risible universe" (419.03) となる。ラテン語で 'risus' は「笑い」を意味し，フランス語で *'risible'* は「ばかばかしい，滑稽な」を意味するから，この世は「ばかばかしい笑える世」となるのである。この解釈は「ムークスとグライプス」の中で最も重要なテーマとされる，*'laudibiliter'* (154.22) に新しい見方を提供することとなる。

こうして用意された二枚目の鏡も，複製を作り出す。一枚目の鏡が神の似姿としての人間を生み出したのに対し，二枚目の鏡は，時を始めることにより複製としての人間のそのまた複製を失楽の世に生み出す。怒蟻(イカアリ)が *"larved ond he larved on"* (418.10) と描かれるのは，「ずっと笑い続けた」ことを第一義的には意味するが，*"larve"* には「幼虫」を意味する 'larva' あるいはその複数形の 'larvae' が含まれている。この直前の文では，"The thing pleased him andt, and andt," (418.09) とあって，怒蟻(イカアリ) Ondt は接続詞の 'and' へと変えられている。この接続詞化と接続詞の連なりは時間の経過と反復を感じさせ，その後に *"larved ond he larved on"* と書かれているのを目にしたときに頭に浮かぶのは，幼虫＝子孫の誕生であろう。このような解釈は，この寓話の後半部における文体の変化によっても支持される。すでに述べたように，後半部には怒蟻(イカアリ)と慈悲希望スのどちらのことを説明しているのか分からない箇所が見られる。その傾向がとりわけ顕著になるのは，今見た *"He larved ond he larved on"* で始まる文以降の斜字体で書かれた部分で，これは二匹の虫の描写から始まるものの，次第にそれを越えた一般的な事柄へと変化していき，二匹の虫の姿は見えなくなっていく。この一般化の中で神の似姿としての人間の複製は，歴史的な広がりを内に取り込むこととなる。

鏡は，しかし，二方向に働く。単に楽園にいた者とそこでの出来事を失楽後の世に複製として伝えるのみならず，失楽後の出来事，つまりは時を失楽前の世界に持ち込む。「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」の時は奇妙に二重化されている。「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」で語られていることも，「ムークスとグライプス」同様楽園を追われる羽目に陥ったその原因となる行為であると考えられるにもかかわらず，それは，失楽を織り込んだ形で書かれていく。つまり失楽をもたらす出来事が，失楽がすでに起こった後の眼差しに照らされて描かれるのである。出来事のレベルでは失楽以前の時間が書き込まれ，意味と用いられる語彙のレベルでは失楽後の時間が書き込まれているのである。二つの時間が「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」の中に共存しているのは，この二枚目の鏡の反射による。ここでジョイスがこの寓話を書くにあたって利用したとされるラ・フォンテーヌの

「セミとアリ」を思い出してもよい。セミは，冬になり食料がなくなって困り果て訪ねていったアリに，夏に歌っていたなら今度は踊りなさい，と言われる。慈悲希望スは，まさにそのセミの言葉を受けるようにして，この寓話の書き出しの部分で踊りに興じている。彼の行ないがもたらした結果がこの寓話の端緒となっているのである。こうしてウロボロスの輪が作られる。「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」の二重化された時間は，『フィネガン』全体の構造をもその延長線上に示しながら，円環を形成しつつもその円環の中に歴史的な広がりを生み出す。こうして "*Sulch* [such] *oxtrabeeforeness* [extrabeforeness] *meat* [G. *mit* : with] *soveal* [G. *so viel* : so much] *behind*" (419. 04) が生まれる。つまり，「そのような極端に前の性質と後の性質が一緒に」見受けられるようになるのである。

V

以上見てきたように，「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」もまた「ムークスとグライプス」同様失楽の物語ではあるが，両者がテーマとする時間と空間の関係は，ちょうど鏡に写したかのように逆転し，両挿話の間に決定的な出来事，つまりは時の獲得による失楽が起こっていることを示していた。神と人間との間の似姿の関係を映し出す鏡に加え，失楽という名の鏡を与えられた「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」は，異なる者の同一性と狂気のテーマを「ムークスとグライプス」以上に大きく響かせることにより，失楽の物語を冗談へと転化しつつも，失楽の出来事の中にそれ以後の時間を持ち込むことで時間を多重化し，歴史的な広がりを示す合わせ鏡となる。

註

1. Adaline Glasheen, *Third Census of* Finnegans Wake (Evanston, Ill : Northwestern U. P., 1977), p. 215. イソップも使っていることは，書き出しの部分 "The Gracehoper was always jigging ajog, hoppy on akkant of his joyicity...." が，イソップの書き出し "In a field one summer's day a Grasshopper was hopping about, chirping and singing to its heart's content." と似ていることを見れば分かる。イソップの寓話を見るにあたっては，インターネット上で公開されているグーテンベルク・プロジェクトの e-text 版を参照した。
2. 時代の古いものの中には「アリとキリギリス」と題名がつけられているにもかかわらず，セミの絵が描かれている挿し絵がある。インターネットのホームページ http://www.geocities.co.jp/Hollywood/3589/grasshopper/Grashopper.html でもそのような図版が

いくつか紹介されている。cf. J. Mitchel Morse, "Plato's Gracehopers," *A Wake Newslitter*, new series, 15, p. 27.

3. 要約にあたっては，Danis Rose and John O'Halon, *Understanding* Finnegans Wake (New York : Garland, 1982) を参考にした。

4. テキストは，James Joyce, *Finnegans Wake* (Faber and Faber, 1975) を用いた。(　　) の中で示しているのは，引用箇所のページ数および行数である。

5. ジョイスはハリエット・ショー・ウィーヴァー宛ての手紙 (1928年3月26日消印) の中で，役に立つ情報として，この挿話の中に見られる虫に関する語を多数列挙し，説明を加えている。Richard Ellmann, ed., *Selected Letters of James Joyce* (London : Faber and Faber, 1975), pp. 329-32 参照。

6. Roland McHugh, *Annotations to* Finnegans Wake, 2nd ed. (Baltimore : Johns Hopkins U. P., 1991), p. 414. 以後註をつけてなくとも，『フィネガン』の単語の意味を考えるにあたっては，常にこの本を参考にしている。

7. 註5参照。

8. Adaline Glasheen, pp. 215-16. ダンテをも含んでいると考えられている。

9. William F. Dohmen, "'Chilly Spaces': Wyndham Lewis as Ondt," *James Joyce Quarterly*, 11, 373.

10. 註5参照。

11. Adaline Glasheen, p. 216.

12. 拙論「時賀死参(じがじさん)，あるいは "awn" についての分裂した物語」，『言語文化』第36巻，pp. 21-37 (一橋大学語学研究室，1999) 参照。

13. David Hayman, ed., *A First Draft Version of* Finnegans Wake (Austin : U. of Texas P.,1963), p. 222. 斜字体の部分は，あとでジョイスによって付け加えられた語であることを示す。もちろん "joyicity" にはジョイス自身の名前も書き込まれている。

14. 草稿では "he was ~~sick~~ **sieck** as ~~sinner~~ **sexton**" となっている (Hayman, p. 222)。消された部分と太字で表された部分は，加えられた変更を示す。

15. ムークスとグライプスに対する怒蟻(イカアリ)と慈悲希望スの関係は，一見明白のように見えるが，その間にシェムとショーンを介在させながら対応の仕方を考えるとねじれていることに気付く。通常ムークスに対応するのはショーンであり，グライプスに対応するのはシェムである一方，怒蟻(イカアリ)に対応するのはショーンであり，慈悲希望スに対応するのはシェムであるとされる。そうすると，ムークス—ショーン—怒蟻(イカアリ)，グライプス—シェム—慈悲希望スというキャラクター群が形成されることになるが，これはムークスとグライプスおよび怒蟻(イカアリ)と慈悲希望スの行動パターンと性格付けからすると，受け入れられない。このような混乱が生じるのは，この後論じるように，時間と空間の関係が二つの挿話間で逆転していることと，怒蟻(イカアリ)と慈悲希望スの奇妙な同一性のためと考えられる。

16. McHugh, p. 416 ; Dohmen, p. 378. このほかにも，417.06 には Vico への言及が見られる。J. S. Atherton は，"acquinatance" (417.08) をアキナスへの言及であると見ている *The Book at the Wake : A Study of Literary Allusions in James Joyce's* Finnegans Wake (Carbondale : Southern Illinois U. P., 1959), p. 139.

17. cf. William York Tindall, *A Reader's Guide to* Finnegans Wake (Syracuse: Syracuse U. P., 1969), p. 229.

18. 註5参照。

19. Tindall, p. 121.

20. Tindall, p. 230.

21. Harry Burrell, *Narrative Design in* Finnegans Wake (Gainesville, Fl: U. P. of Florida, 1996), p. 186.「怒蟻(イカアリ)と慈悲希望ス」を失楽の物語と読むにあたっては，バレルに多くを負う。しかし彼は，哲学の誕生の意味，怒蟻(イカアリ)と慈悲希望スの同質性，慈悲希望スに虫の言語によって書き込まれた怒蟻(イカアリ)性，二枚目の鏡については触れていない。

22. Dohmen, p. 376.

23. 怒蟻(イカアリ)とウィンダム・ルイスの関係については Dohmen, "'Chilly Spaces': Wyndham Lewis as Ondt," *James Joyce Quarterly*, 11, 368-86 参照。